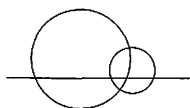


〔講演会〕



愛知大学東亜同文書院大学記念センター資料の名古屋展示会・講演会

東亜同文書院から愛知大学へ

——近衛家、荒尾精、孫文、中国アジア大旅行、日中交流——

2010年11月28日（日）

松坂屋名古屋店南館8階 マツザカヤホール

【司会】 お待たせいたしました。時間となりましたので、ただいまから愛知大学東亜同文書院大学記念センター主催の名古屋展示会・講演会「東亜同文書院から愛知大学へ——近衛家、荒尾精、孫文、中国アジア大旅行、日中交流——」を開始いたします。開催に当たりまして本学の佐藤元彦学長よりご挨拶がございます。よろしくお願いいたします。

【佐藤】 皆さんこんにちは。本学東亜同文書院大学記念センターによる名古屋講演会・展示会を開催しましたところ、このように大勢に方々にお集まりいただき、まずは心から感謝申し上げます。ご案内の通り、今回は、この間センターが文部科学省の私立大学学術研究高度化推進事業の補助金を得て進めてきたオープン・リサーチ・センターの事業としては最後の講演会・展示会となります。一連の講演会・展示会の最後を、工藤美代子先生を講師としてお迎えしてこの名古屋において締めくくるということは誠に意義深く、ご多忙の中をスケジュール調整いただきました工藤先生に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、多くの方々に既にご認識いただいていると思いますが、この機会に、東亜同文書院を前身とする愛知大学が中国に関する研究教育という点でどのような取り組みをしてきたのかを、改めて

私なりにご紹介させていただきたいと思います。まず、研究についてですが、本学に最初に設置された研究所は国際問題研究所ですが、1948年の設立時の国際情勢から研究所名に中国を入れることが難しく、国際問題を研究する機関としてスタートしたという経緯があります。しかし、その実態は中国に関する研究が中心であったことは、学外を含めて多くの方々がご認識いただいている通りです。1955年には、現在の中日大辞典編纂所が華日辞典編纂処としてスタートします。1968年に最初の『中日大辞典』が刊行され、以後1986年に第二版、翌87年に増訂第二版、そして今年2月に久しぶりの全面改訂を経て第三版が出版されたことは、皆さんもご存じのことかと思えます。このような実績の上に、2002年には国際中国学研究センターが創設され、その取り組みは、文部科学省の21世紀COEに採択されました。既に21世紀COEとして事業は終了していますが、その後大型の科研費を得て、西部大開発や中国企業の海外進出についての共同研究を進め、国際的にも高い評価を得ているところです。

教育という点に目を転じますと、各学部の中で中国についての教育を行なってきたという状況が長らく続きますけれども、1997年に現代中国学部という日本で唯一の現代中国についての学部が設置されています。その教育というのは極めて特

徴的、また社会的評価が高いところでございまして、1学年全員を、2年生の初めに中国に送り込みまして、周恩来の出身校ということでよく知られております天津の南開大学において4か月間、中国語を中心としたトレーニングを積んでいただくことになっております。これは学部設立当初から始まっておりますので、もう10年を超える実績を生み出しているところでございますが、高校までに中国語を学んだ機会が無い若い人達に、中国語を現場においてしっかりと叩き込む教育をするという点では、文部科学省を始めとして非常に評価を得ているところでございます。さらにその身に付いた中国語を使いまして今度は3年生、4年生のプログラムとして、現地での調査、あるいは現地でのインターンシップ、こういったものをこの間展開してきているところです。

現代中国学部の今申し上げました教育というのは、「三現地主義」あるいは現地の「現」だけを取って「三現主義」という形で、この間高い評価を得ているところは皆さんよくご存じのことではないかと思えます。さらに大学院という点でいきますと、先ほどの21世紀COEプログラムにも関わることでありますけれども、中国の南開大学と中国人民大学の2大学と一種のテレビ会議システムを構築いたしまして、それを使って中国語もしくは英語で授業を行なう、日本語はいっさい使わないというプログラムを展開しております。その結果として博士の二重学位という制度をスタートさせたのも、おそらく本学が日本の中では最初であったのではないかと思います。あるいは世界的に見ても、博士課程の二重学位プログラムというのは極めて珍しい、未だに珍しいというふうに考えますので、そういった点でも注目されるプログラムではないかと思えます。そのプログラムを通して、日本人のほうはまだ実績という点では充分ではないんですけれども、中国人で愛知大学と中国側の大学の2つの博士号を取得するというケースが毎年出てきております。そういった方々

は中国の大学で教員になったり、あるいは中国のシンクタンクにおいて非常に優秀な研究者として現在勤めておられるという状況があります。

さらには、中国政府教育部が展開しております孔子学院、これも本学において大々的に展開をしているところでありまして、その院長は皆さんもよくご存じの、現在NHK中国語テレビ講座で講師を担当しておられる本学の荒川清秀教授でございます。孔子学院もおそらく受講生の数であるとか収支という点では、日本の中でも非常によい結果を出しているのではないかと考えております。

そういう形で、言ってみれば東亜同文書院時代の研究や教育というものが愛知大学にDNAとして受け継がれ、おそらく個別にいろいろと配慮いたしますと、もっといろんなことをお話しなくてはいけないと思いますけれども、今申し上げましたような形で実は花開いていっているというのが現状でございます。

さて、これも多くの方がご存じではないかと思えますけれども、2012年の4月には名古屋駅のすぐ近くの笹島地区に新しい校舎を開校する予定で、現在建設をしております。新幹線からも非常によく見える工事現場ではないかと思えますけれども、そちらは名古屋市の再開発の一環としての新しいキャンパスでございますので、当然名古屋市としての再開発のコンセプトがあるわけで、それは国際歓迎・交流ということでございます。とりわけ国際という点につきましては、今申し上げましたような中国についての研究や教育の本学の実績が評価をされて、名古屋市として愛知大学があの場所に進出することを許可されたというふうに認識をしているところであります。笹島の新校舎では現代中国学部、またもう1つ、これは英語の点でこの間実績を上げております国際コミュニケーション学部、そういった学部が中核的な役割を果たすことになろうかと思えますけれども、まさに名古屋市の国際化に向けての表玄関として本学が大きな貢献をしていく、そういうことを目指

しているところでございます。

だいたい長く話をしてしまいましたけれども、冒頭にもお断りしましたように、この機会に東亜同文書院を中心とする愛知大学の前身、これは組織として機関としての東亜同文書院大学に加えて、多くの他の旧制の高校なり大学から愛知大学に移籍あるいは進学をされたということも含めて申し上げているわけでありますけれども、その精神あるいはその実績がいかに本学に受け継がれている

のかということを簡単にご紹介申し上げまして、私の冒頭の挨拶にさせていただきたいと思えます。改めまして本日は多くの方々にお集まりいただきまして、誠にありがとうございました。また、共催をいただいた愛知大学同窓会、さらには後援をいただいた新聞社、報道機関等々に対しまして、重ねてお礼を申し上げます。

【司会】 佐藤先生ありがとうございました。